



母亡き後に仏壇を持つか、持たないかで悩んでいます。母80代、私50代(娘・独身)。もし、仏壇を持たなかった場合、亡くなった方の供養はどのように行えばよいのでしょうか。身内の方にご説明すれば理解していただけるでしょうか。ちなみに、お墓は永代供養を申し込んでおります。(住所・氏名不明・50代・女性)



今回、ご相談のお仏壇について、その起源から考えてみましょう。

仏壇の起源

古代印度(インド)では岩石・土砂などを積み上げて、簡易的な『柵』を造り、森羅万象の神仏を安置していたとの伝承があります。ここから『神仏の柵』を仏壇というようになったのだとか。

また、『更科日記』の作者・菅原孝標女(すがわらのたかすえのむすめ)が、薬師信仰の証として寺院にある薬師如来を自宅に安置したことから、仏像を自宅(堂)に持つ。仏堂(じぶつどう)に持つ。仏壇というようになったともいわれています。このように考えますと、お仏壇は信仰や供養を行う上での人為的なものから始まったことがうかがえます。現代では、お葬式をお勤めすると、自動的に持つことが一般的であるようなお仏壇も、そのルーツをたどれば、お仏壇を持つか、持たないかは、強制的なものではなく、ご自分の判断ということになります。

8050問題と仏壇

親が80代・子が50代の世代には、介護などの社会問題があり、8050問題といわれることがあります。8050世代には、お仏壇・お墓・トートローマー・フニシン(ご遺骨)に関連する問題も多くあり、今回のご質問のお仏壇の作成・継承についても身近な案件ではないでしょうか。

理想としては、お母様にもしものことがあったとき、きちんとお仏壇を持ち、供養を行ってあげるべきとのご意見が多数を占めるかもしれません。しかし、その理想を追い求めるあまり、近い将来、喪主の後継者が不在になる可能性が高いなど、目に見えるような問題がありながらお仏壇を持つことは、もしかしたら故人様のご供養を行うことができなくなる、無縁仏となる可能性も否定できません。

お仏壇は故人様の現住所、お墓は故人様の本籍地

『お仏壇は故人様の現住所、お墓は故人様の本籍地』という格言を恩師からうかがったことがあります。「お仏壇とお墓、どちらに

故人様がいらっしゃるのですか？」このようなご質問のとき、「故人様の真心はお仏壇に、故人様のお身体(ご遺骨)はお墓に」とお話しされていたユタの先生がおられました。

仏教的、専門的な解釈は別として、この考え方を応用しますと、沖縄での法事や年中行事の供養は、お仏壇で行うことが主流ではあります。諸事情があるとき、現住所と本籍地、どちらも故人様にとって大切な場所であることから、お墓でも行う前例もあるということですが。

お墓の永代供養の応用

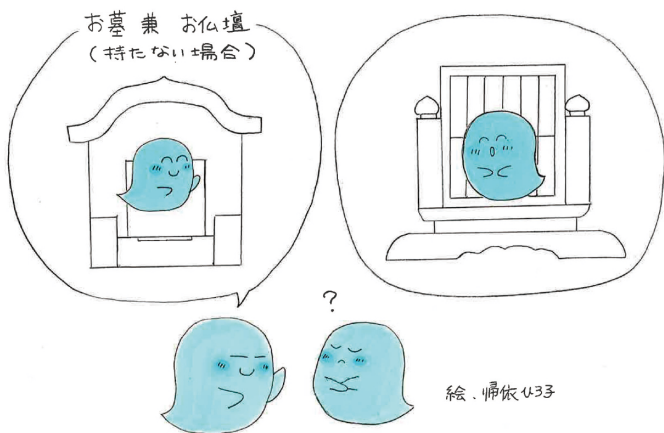
今回、お墓の永代供養を申し込まれていることで、管理者の宗教法人または、財団法人の担当者の方と相談して、お仏壇を持たないこともありうることをお伝えされてみるのも一案かと思えます。

お墓で法事や年中行事を行う前例は多くあり、そのことが可能かどうかの確認ということです。お墓の永代供養は、同時に永代使用権でもありませので、ご理解してください。身内の方々に対しては、

ご質問の内容を事前相談して、そのままお話しされれば、無理強いをしてまでお仏壇を持つことを勧められることなく、諸事情をご理解してくださるような思いがします。

お仏壇とお墓

永代供養の一例として、沖縄ではお墓の中の故人様のご遺骨の隣に、その故人様のトートローマー(お仏壇の象徴)をカリウンチケ(仮安置)しつつ、お仏壇にお墓として永代供養を行う方法もありますので、今回、事前にお墓を永代供養にされていることは、お仏壇を持たないときの最善の解決策に該当するのではないのでしょうか。



絵・帰依 433